



特集

MWC19 Barcelonaで開いた 5Gプラットフォームの時代

198の国と地域から約11万人がバルセロナに集まった。2,400社が出展し、7,900人ものCEOが集まるほどのにぎわいがあったと主催者はアピールする。そして、このメッセージも忘れない。「世界で最大規模のトレードショーとして『zero carbon footprint』の認定を得たクリーンなイベントです」。さて、MWC19で浮かび上がってきたテーマは、5G実用の技術カウントダウンよりも、5Gプラットフォームは何をもたらすのか。この模索が始まったことにあった。(レポート・写真:吉井 勇・本誌編集部)



ツアーだから情報の“ごちゃ混ぜ”

情報と向き合うとき、多様性、つまりダイバーシティの重要性をよく聞く。では、さまざまな人が数多く集まれば、それで多様性を実感できるのか。それは烏合の衆だろう。そこに「ごちゃ混ぜ」という交流が入ると、多様な思考が頭の中で広がる。このことを改めて感じたのが本誌MWCツアーであった。総勢19人は、NHK関係、民放、ラジオ、ケーブルテレビ、メーカー、地域通信会社、シンクタンクと多岐にわたる構成で、複数企業の訪問や、MWCのブースからブースへと歩いたのである。訪ねながら質問していくことで、ごちゃ混ぜが生まれ、それぞれの立ち位置の問題意識を知り合うことになる。

その成果として、このMWC特集の筆者陣にツアーメンバーが並ぶ。ITフリージャーナリスト西田宗千佳氏を除いて、ツアーメンバー7人が8本の原稿を寄せている。出展者からも寄

稿がある。

権利流通の仕組み、 セキュリティの問題

ツアーの様子を紹介しよう。まず、ツアーは英ロンドンから入り、到着後すぐにADテクノロジー「In-Video Advertising」を提案するMirriadでプレゼンを聞いた。映画『アバター』の制作で採用された、18の特許を有する独自開発の技術を昨年から放送用AD技術に展開している。コンテンツ画像を解析し、AD表示スペースを見つけ、そこにクライアントメッセージを入れ込み、自然に受け取ってもらうというアプローチである(33ページに画面写真掲載)。すでに十数社で採用されている。

続いてBBC R&Dを訪ね、5人の研究者から成果を聞いた。BBCの放送技術を研究する拠点で、NHKの技研という役回りである。ボイスを生かしたプロジェクトの1つとして、イギ

リス北部の離島一帯で5Gによる地域づくりプロジェクトがある。そこで5Gラジオの実験を20端末で準備しているという。これはMWC会場のCiscoブースで、イギリス政府のプロジェクトとして紹介されていた。その他、機械学習とAIの研究など多彩な研究アプローチに驚いた。プレゼンをコーディネートしてくれたHead of Internet Research & Future ServiceのGeorge Wright氏が並べたキーワード(25ページに写真掲載)が、今後の放送技術と



18件の特許を持つAD技術の提案で注目を集めるMirriad